串間市文化財調査報告書第１集

猪之椛遺跡

（いのはえ）

県営農地開発事業奈留地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概報

１９８７

串間市教育委員会

序

当市において埋蔵文化財の発掘調査は昭和34年下弓田遺跡以来の発掘調査のはこびとなり地域住民の深い関心をよせ行なわれました。

串間市教育委員会は県営農地開発事業にともない奈留地区土地改良区（長野団地）内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本書は昭和61年度に実施した猪之椎遺跡の発掘調査の概要報告書です。

本年度調査では縄文時代、平安時代、鎌倉時代の土器、石器、土師器、須恵器等が多量に出土し、多大な成果をあげることができました。発掘で得られた成果は私達の貴重な文化的財産のひとつとなり、また社会、学校教育の場で広く活用され当市における学術資料になることと存じます。

尚、発掘調査に際しましては宮崎県教育庁文化課、南那珂農林振興局、奈留土地改良区等、各関係機関をはじめ地元市民各位から積極的な御協力をいただきました。

心から御礼申し上げます。

昭和62年3月

串間市教育委員会

教育長　本　田　　通

例　　言

1. 本書は、串間市奈留地区長野団地の県営農地開発事業に伴い、昭和61年度に実施した猪之椪遺跡埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は、串間市教育委員会が主体となり、県文化課主任主事長津宗重が担当した。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体　串間市教育委員会

教　育　長　本　田　　通

社会教育課長　田　中　靖　基

社会教育文化係長　武　田　博　志

調査員　長　津　宗　重（宮崎県教育委員会文化課主任主事）

4. 遺物の復元・実測図作成・トレースは、河野豊美・坂元清子・溝口フサ子・荒武望恵の協力を頂いた。
5. 本書の執筆は、武田・長津が分担し、文責については目次に明記している。
6. 本書の編集は長津が当った。
7. 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海抜絶対高である。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1
1.　発掘調査に至る経緯 ……（武田）…… 1
2.　猪之椪遺跡周辺の歴史的環境 ……（長津）…… 1
第Ⅱ章　遺構と遺物 ……（長津）…… 5
1.　調査区の設定と概要 …… 5
2.　包含層の状態 …… 5
3.　縄文時代の遺構と遺物 …… 5
4.　平安時代の遺構と遺物 …… 6
第Ⅲ章　ま　と　め ……（長津）……19

挿　図　目　次

第１図　猪之椪遺跡周辺の遺跡分布図 …… 3
第２図　猪之椪遺跡地形図 …… 6
第３図　Ｂ地区東壁土層断面図 …… 7
第４図　縄文早期の遺構分布図 …… 8
第５図　２号集石遺構 …… 9
第６図　Ａ地区出土縄文早期土器実測図(Ⅰ) ……11
第７図　Ａ地区出土縄文早期土器実測図(Ⅱ) ……12
第８図　Ｂ地区出土縄文早期土器実測図(Ⅰ) ……13
第９図　Ｂ地区出土縄文早期土器実測図(Ⅱ) ……14
第10図　縄文前期・後期土器実測図 ……17

表　目　次

第１表　遺跡地名表 …… 4
第２表　グリッド毎Ｖ層出土焼石総重量表 …… 9
第３表　集石遺構観察表 ……10
第４表　縄文土器観察表 ……15

図　版　目　次

図版１　猪之椪遺跡遠景・Ａ地区遠景 ……21
図版２　Ａ地区出土縄文早期土器・Ｂ地区出土縄文早期土器 ……22

第Ⅰ章　序　　説

1.　発掘調査に至る経緯

宮崎県串間市において、昭和58年度から５ケ年事業として奈留地区（長野団地・仲別府団地）に南那珂農林振興局が実施する県営農地開発事業が行なわれている。それに先立ち、事業区内の埋蔵文化財の調査として昭和57年８月31日～９月２日に分布調査、昭和59年３月14日～24日、昭和60年７月８日～７月11日に試掘調査が串間市教育委員会と県文化課によって行なわれた。調査により事業区内に10ケ所の遺跡の存在が判明したため、南那珂農林振興局、奈留土地改良区、県文化課、市教育委員会との埋蔵文化財の保護について協議が行なわれたが事業施行上現状保存が困難な部分がありその記録保存の措置がとられることになった。初年度として、長野団地の猪之椪遺跡の発掘調査が実施され、他の遺跡については、県営農地開発事業の進捗状況により随時実施される予定である。

この調査は、串間市教育委員会が主体となり、県文化課主任主事長津宗重氏の担当で昭和61年11月４日から昭和62年２月６日まで発掘調査が行なわれた。

2.　猪之椪遺跡周辺の歴史的環境

串間市は九州の東南東端に位置し、東は太平洋の日向灘に、南は志布志湾に面している。北部には鰐塚山（標高 1,119m）を最高点とする南那珂山地が広がり、 それに挟まれて福島川が流れ、両側に平野部を形成している。

猪之椪遺跡（串間市大字奈留字猪之椪）は、串間市の中心から北北東へ約９㎞離れた福島川を南に臨む南那珂山地の一丘陵先端部（標高約80m）に位置する。猪之椪遺跡の歴史的環境を知るために、市内の遺跡を時代順に概観する（第１図）。

旧石器時代の遺物・遺跡は確認されておらず、猪之椪遺跡の発掘調査でも検出されなかった。

縄文時代の遺跡としては下弓田遺跡（大字南方字孤塚）が代表的である。早期の遺跡としては隆帯文土器を出土した大平遺跡(大字大束字大平)が知られている。(1) また出土地不明であるが、中央公民館蔵の磨製の環状石斧がある。今回の発掘調査によって猪之椪遺跡で早期の集石遺構が検出され、押型文土器・塞ノ神式土器が出土した。山形の平行沈線を組合せた大平式土器が大平遺跡や下弓田遺跡で出土している。後期の遺跡とし

ては福島川河口左岸の下弓田遺跡[2]があり、方形プランの竪穴住居3軒が検出され、下弓田式・市来式・草野式土器や磨製石斧・石錘・凹石・磨石が出土している。特に石器組成の70～80％を両端打ち欠きの石錘が占めていることは立地を含めて、当遺跡の生産活動の中で漁撈活動が一つの中心であったことが想定される。[3] 縄文土器が出土した所は、福島町南方、本城字ウレシノ原・小畑・広口・上千野、崎田字南浜崎、市木小、南方字城ノ脇が知られている。打製石斧・磨製石斧などの石器は、市木字石並・郡司部、西方字祝田・岩井田、本城字小田代・中園から出土している。[4]

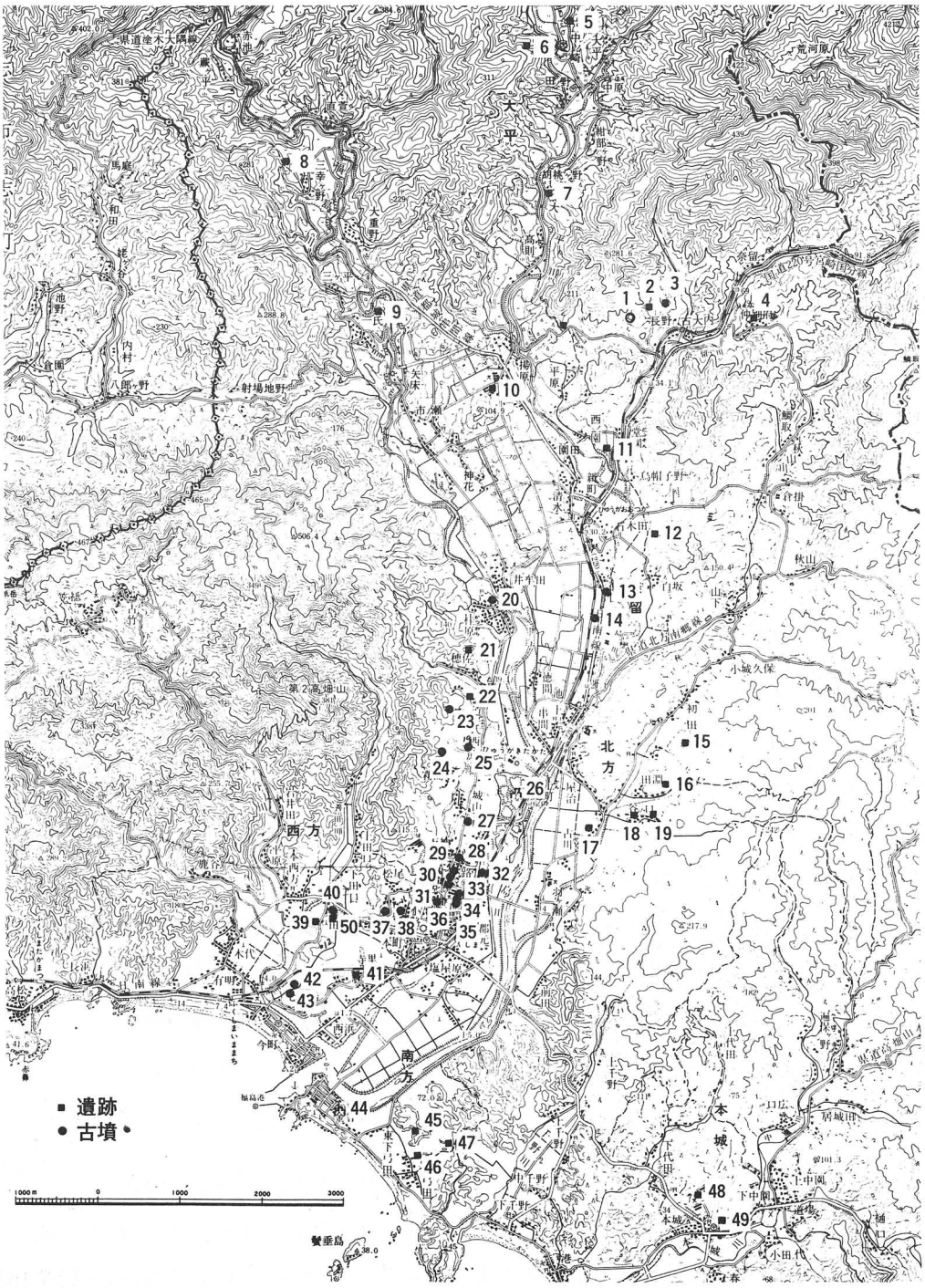
弥生時代の前期の遺跡は確認されていない。中期以降になると市内の各地で遺跡が形成される。特に屋治遺跡[5]（北方字屋治）からは後期末葉～古式土師器の土器が多数出土し、肩部に蛇状のヘラ沈線を施した壷が有名である。当時代の発掘調査が行なわれていないので、竪穴住居跡などの生活遺構は確認されていない。注目されるのは喜田貞吉氏が発見したという西方字本西方の貝塚であるが、昭和27年には既に消失している。[6]

王之山出土と伝えられる前田家蔵の穀壁は、出土地の確定ができず、出土状態も不明である。

市内の遺跡としては、大束で4ケ所、福島で18ケ所、北方で6ケ所、本城で17ケ所、市木で3ケ所、都井で4ケ所知られている。[7]

古墳時代の遺跡としては集落跡は確認されていないが、前方後円墳3基・円墳25基・地下式横穴墓13基が確認されている。[8] 前方後円墳は福島川右岸の標高5～10mに造営されているが、発掘調査されていないので時期や内容については不明である。昭和28年に調査された銭亀塚[9]（西方字本西方）の石室からは、丸玉1・銀環1・ファイアンス玉1・小玉35・鏡片・鉄鏃が出土している。本城の鬼ケ城の円墳群は横穴式石室・石棺系竪穴式石室を内部主体としており、5世紀後半～6世紀の古墳群である。市木字藤浦の箱式石棺[10]からは金銅装の頭槌太刀が出土しており、7世紀前半の首長層に比定される。箱式石棺は本城の湊普門寺や大平字徳山にも分布している。徳山の地下式横穴墓は西方字南畑と大平字徳山に分布している。昭和45年に調査された徳山地下式横穴墓群[11]は福島川左岸の標高30m前後の台地上に立地しており、13基確認されている。当地下式横穴墓群の構造の特徴としては、玄室規模が竪坑に比して小さい点と、羨門幅は広いが羨道は非常に短い点である。副葬品は剣や鉄鏃であり、6世紀の地下式横穴墓群である。徳山地下式横穴墓群のある丘陵の西北の丘陵では、箱式石棺以外に枕を造り出す刳抜石棺が存在し、対峙的な関係にある。

以上のように、串間地方は縄文時代早期の時期から周辺地域との交流を行なうと伴に、各時代各時期のうねりを受けながら独自の対応を行なっている。



第１図　猪之槌遺跡周辺の遺跡分布図

第1表　遺跡地名表

1. 猪之椪遺跡	2. 猪之椪第2遺跡(仮称)	3. 猪之椪第3遺跡(仮称)
4. 仲別府遺跡	5. 大平遺跡	6. 中野遺跡
7. 末広遺跡	8. 三幸ケ野遺跡	9. 一氏遺跡
10. 揚原遺跡	11. 西ノ園遺跡	12. 白坂遺跡
13. 石木田古墳	14. 徳山表下式横穴墓群	15. エラノ原遺跡
16. 天徳原遺跡	17. 大田井遺跡	18. 平原遺跡
19. 谷口遺跡	20. 桂原古墳(福島17号)	21. 穂佐ケ原第1遺跡
22. 穂佐ケ原第2遺跡	23. 福島18号墳	24. 王子谷古墳
25. 福島19号墳	26. 櫛間城跡	27. 福島1号墳
28. 福島11号墳	29. 福島8号墳	30. 福島6・7号墳
31. 福島9号墳	32. 毘沙門塚古墳(福島5号墳)	33. 剣城塚古墳(福島4号墳)
34. 福島2号墳	35. 福島3号墳	36. 福島10号墳
37. 松尾2号墳	38. 松尾3号墳	39. 西方貝塚
40. 銭亀塚古墳	41. 松清遺跡	42. くずれ崎1号墳
43. くずれ崎2号墳	44. 金谷城跡	45. 下弓田第2遺跡
46. 下弓田遺跡	47. 下弓田第3遺跡	48. 本城遺跡
49. 嬉志野遺跡	50. 唐人原遺跡	

【註】

(1) 茂山　護　「串間市大平出土の縄文式土器」『九州考古学』1号 1957

(2) 石川恒太郎他　「下弓田遺跡」『日向遺跡総合調査報告書』第1輯 1961

(3) 日高　孝治　「石器について」『宮崎大学埋蔵文化財調査報告』I 1985

(4) 上代日向研究所　「日向上代遺蹟遺物地名表」1944
田中　熊雄編　「宮崎県縄文・弥生期考古遺物地名録」『宮崎県文化財調査報告書』第2輯 1958

(5) 田中　茂　「宮崎県下出土の弥生式土器」『宮崎考古』第1号 1975

(6) 石川恒太郎　『宮崎県の考古学』 1968

(7) 註(4)に同じ

(8) 宮　崎　県　『県指定古墳台帳』 1981

(9) 鏡山　猛　「銭亀塚古墳」『日向遺跡総合調査報告書』第2輯 1962

(10) 石川恒太郎　「串間市木箱式石棺調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第5輯 1961

(11) 石川恒太郎　「串間市徳山地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集 1972

第Ⅱ章　遺構と遺物

1. 調査区の設定と概要

猪之椪遺跡（串間市大字奈留字猪之椪）は、串間市の中心から北北東へ約９㎞離れた福島川を南に臨む南那珂山地の一丘陵先端部（標高約80ｍ）に位置する（第２図）。

昭和60年７月８日～11日の試掘（Ｂ地区に２本のトレンチ）の結果、磨石・土師器・青磁などが出土した。

昭和61年11月４日～昭和62年２月６日の本調査では、５ｍ×５ｍのグリッドを磁北方向に設定し2,000㎡の面積を調査した。アカホヤ下層の縄文早期の土器としては、Ａ地区で口縁部直下にヘラ様工具による押圧文を有する貝殻条痕文の土器・山形押型文・条痕文が、Ｂ地区で撚糸文の塞ノ神式土器・山形押型文・格子目押型文・１単位４～５条の短い貝殻条痕文を斜位に不定方向に施文する土器が出土した。石器としては打製石鏃・局部磨製石鏃・磨石が出土した。同時期の遺構としては集石遺構が６基検出された。アカホヤ上層の耕作土中から縄文前期の曽畑式土器、平安時代の土師器の坏・甕、布痕土器、縁釉、青磁などが出土した。しかし、当時期の遺構は全くなかった。

2. 包含層の状態

当遺跡ではアカホヤ上層は耕作によって残存状態はあまり良好ではなかった。基本層序は、Ⅰ層が暗褐色土層（Hue 7.5 YR 3/3 ・耕作土・砂質）、Ⅱ層が黒色土層（7.5 YR 2/1 ・緻密）、Ⅲ層が褐色土層（7.5 YR 4/3 ・緻密）、Ⅳ層が橙色土層（7.5 YR 6/8 ・アカホヤ層）、Ⅴ層が明褐色土層（7.5 YR 5/6 ・粘質）、Ⅵ層が黒褐色土層(7.5 YR 2/2 ・若干粘質)、Ⅶ層が暗褐色土層（7.5 YR 3/4 ・粘質で小砂礫を含む)、Ⅷ層が青灰色土層（7.5 YR ・粘質・地山）である（第３図)。 Ｂ地区の東端部ではⅡ層が褐灰色土層（7.5 YR 4/1 ・火山灰）に入れ換わり、Ａ地区の東端部とＢ地区の西部ではⅤ層とⅥ層の間に明褐色土層（7.5 YR 5/8 ・硬質）がある。

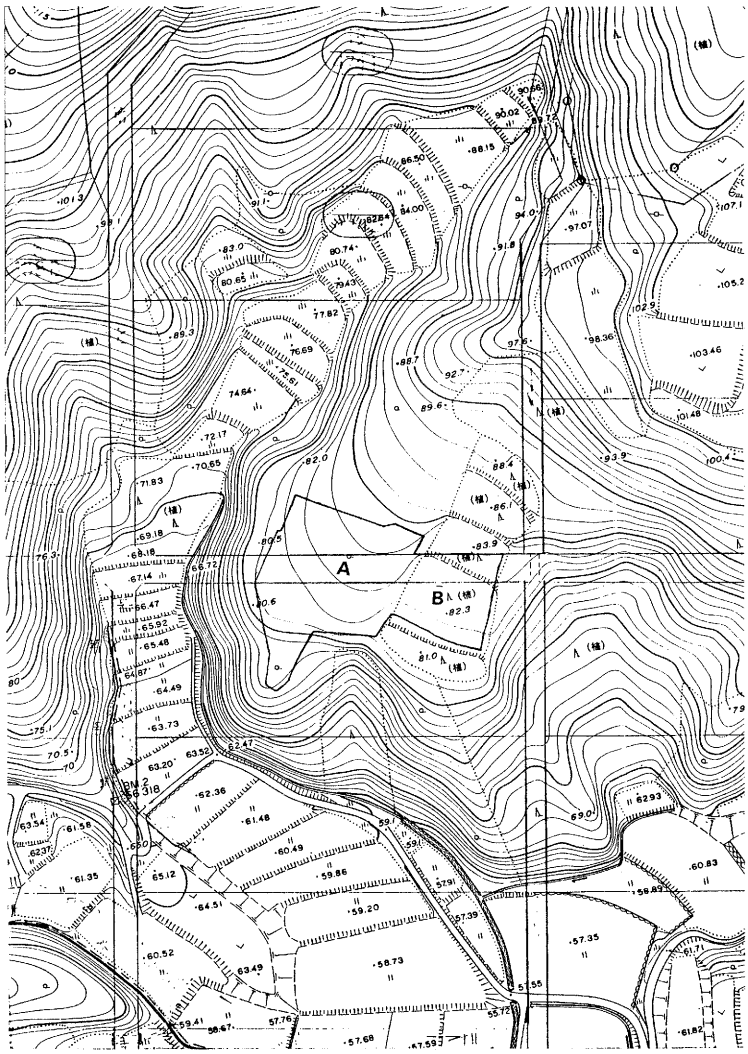
3. 縄文時代の遺構と遺物

アカホヤ層下層のⅤ層（明褐色土層）で集石遺構が６基検出され、山形押型文・格子目押型文・貝殻条痕文・塞ノ神式土器が出土した（第４図)。 アカホヤ層では遺構は検出されず、また包含層としても残存しておらず、Ⅴ層上面で前期の曽畑式土器や後期の粗製甕が出土した。

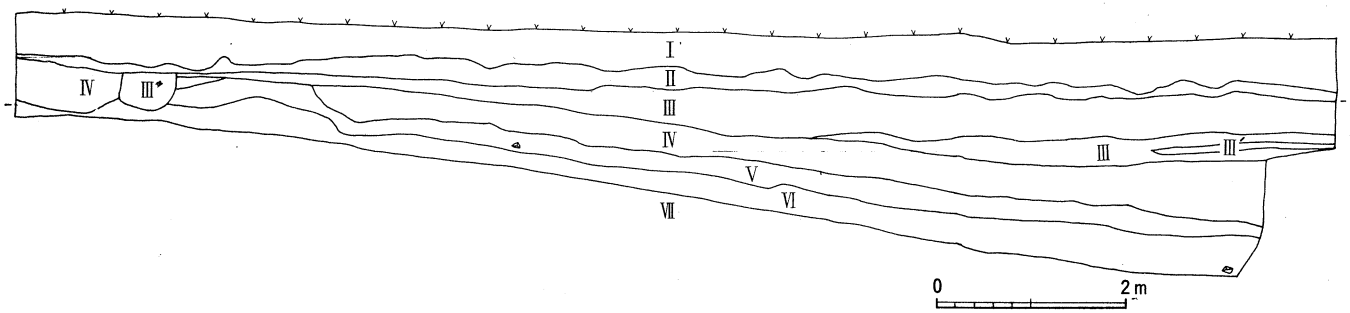
早期の遺構と遺物

(1) 集石遺構

集石遺構はＡグループ（２～５号集石）とＢグループ（１・６号集石）に分かれ、Ａグループは標高80.0～81.25ｍに、Ｂグループは標高81.0～81.75ｍに分布する。明確な掘り込みを有するものは１・２・６号で、３・４・５号は有しない(第5図、第3表)。焼石の集中が見られるグリッドはｆ－5、ｄ－6・7・9、ｋ－5、ℓ－5である。焼石に混って扁平な石がｃ－7・ℓ－5で集中して出土している。特にｃ－8・9では小さく割れた焼石が長径4.0ｍ、短径2.3ｍの範囲で集中している。各グリッドの石の出土量については第２表の通りである。

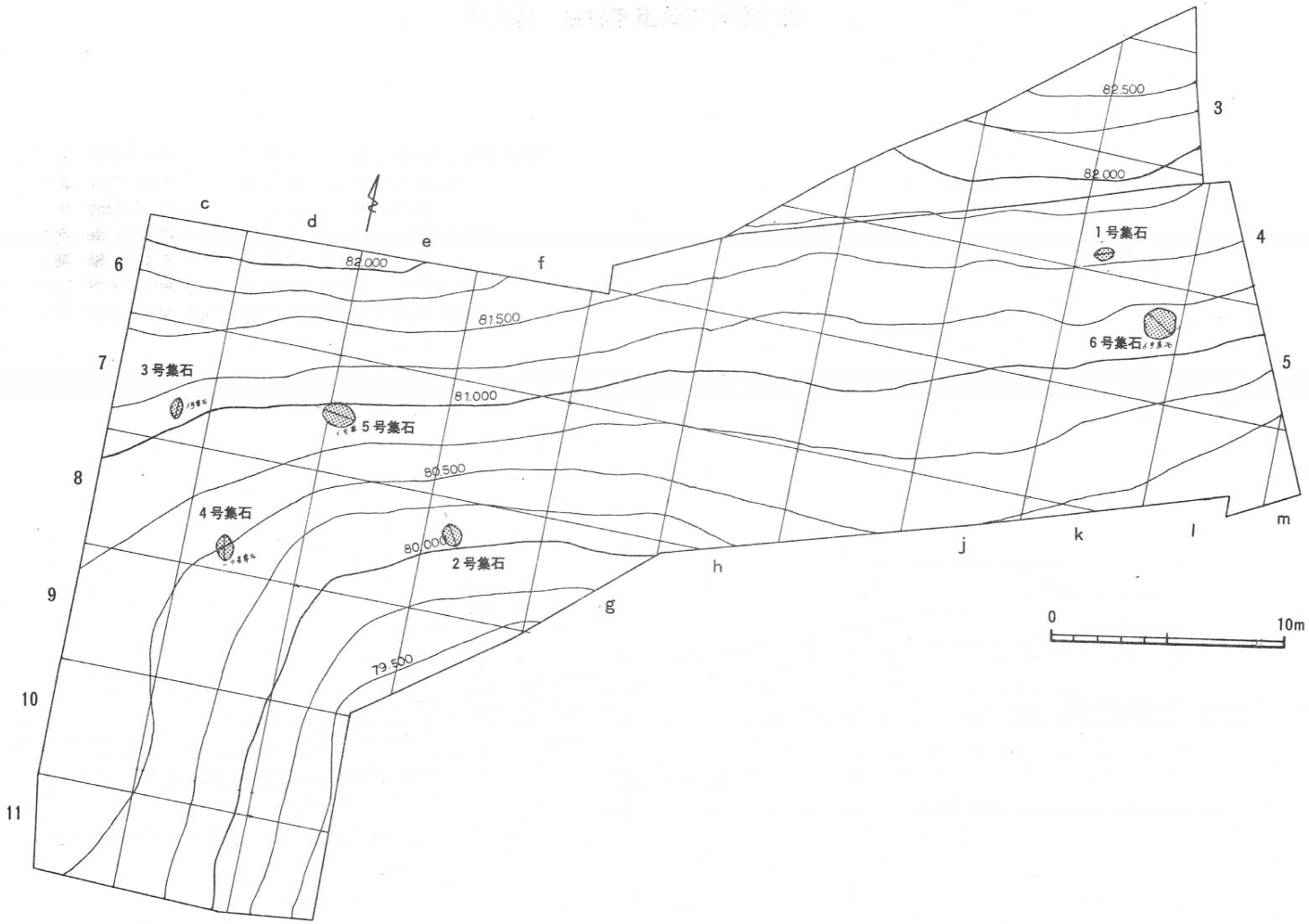


第２図　猪之椪遺跡地形図



Ⅰ層　暗褐色土層（Hue　7.5ＹＲ　3／3　耕作土・砂質）
Ⅱ層　褐灰色土層（　　7.5ＹＲ　4／1　・火山灰）
Ⅲ層　褐　色　土層（　　7.5ＹＲ　4／3　・緻密）
Ⅳ層　橙　色　土層（　　7.5ＹＲ　6／8　・アカホヤ層）
Ⅴ層　明褐色土層（　　7.5ＹＲ　5／6　・粘質）
Ⅵ層　黒褐色土層（　　7.5ＹＲ　2／2　・若干粘質）
Ⅶ層　暗褐色土層（　　7.5ＹＲ　3／4　・粘質で小砂礫を含む）

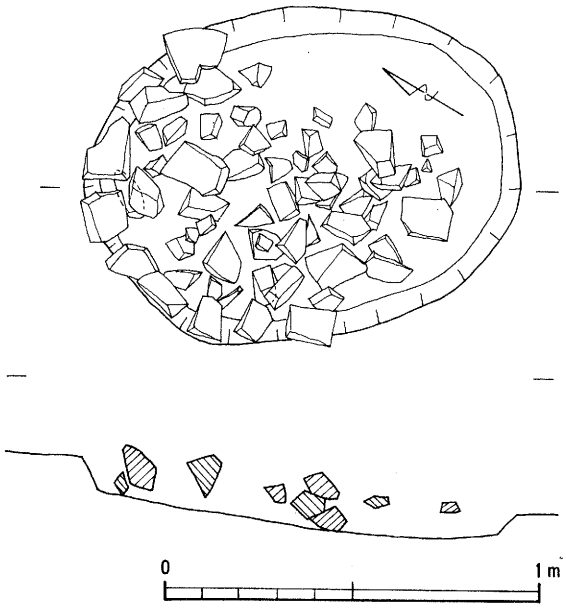
第３図　Ｂ地区東端土層断面図



第４図　縄文早期遺構分布図

第2表　グリット毎V層出土焼石総重量表

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	ℓ	m kg
3										5.0 (0.3)	2.75 (0.2)		
4										24.25 (1.5)	45.25 (2.7)	1.75 (0.1)	
5							12.25 (0.7)	12.0 (0.7)	43.75 (2.6)	6.25 (0.4)	124.75 (7.5)	57.8 (3.5)	
6	—	33.0 (2.0)	19.5 (1.2)	14.5 (0.9)	57.25 (3.4)	6.25 (0.4)	6.0 (0.4)	22.85 (1.4)	21.75 (1.3)	15.5 (0.9)	8.5 (0.5)	23.5 (1.4)	3.0 (0.2)
7		23.5 (1.4)	81.75 (4.9)	76.5 (4.6)	64.0 (3.8)	7.5 (0.5)	12.5 (0.8)	15.0 (0.9)	4.0 (0.2)	9.75 (0.6)	1.5 (0.1)		
8		48.5 (2.9)	47.0 (2.8)	33.5 (2.0)	19.5 (1.2)	60.0 (3.6)	3.0 (0.2)						
9		72.25 (4.3)	125.0 (7.5)	20.25 (1.2)	4.0 (0.2)	2.0 (0.1)							
10		24.5 (1.5)	36.25 (2.2)	8.0 (0.5)	1.5 (0.1)	—							
11				1.5 (0.1)	—	—							総計 1,664.4 kg



第5図　2号集石遺構実測図

第3表　集石遺構観察表

	グリッド	集石	土坑	重量kg	焼土	炭化物	遺物
		長径×短径cm	長径×短径×深さcm				
1号	k－4	85 × 45	93 × 54 × 8.5	34.75	無	無	
2号	f－8	102 × 83	116 × 89 × 11	58.75	無	無	
3号	c－7	85 × 39	無	22.75	無	無	
4号	d－8	108 × 75	無	17.75	無	無	
5号	e－7	137 × 114	無	29.75	無	無	
6号	k－5	146 × 140	132 × 117 × 60	102.25	無	無	土器

(2)　縄文土器

早期土器

縄文早期土器はj～1－5・6、j－4、d－8・9に集中しており、特にk－5、ℓ－5・6に集中している。早期土器は文様によって次のように分類される。

A類　山形押型文土器（第6図1～4・第8図23～28・第9図41・42）

B類　格子目押型文土器（第8図29）

C類　口縁部に貝殻腹縁による刺突文を、口唇部に刻目を施す土器（第8図30・31）

D類　貝殻条痕文土器

E類　貝殻腹縁刺突文土器

a．斜方向或は格子状に刺突する。（第6図8～11）

b．綾杉状に刺突する。（第6図14）

c．横方向に刺突する。（第6図12）

F類　貝殻腹縁条痕文を短くジグザグに施す土器（第8図33～36）

G類　ヘラ状工具で横方向或は縦方向に施文する土器（第6図13）

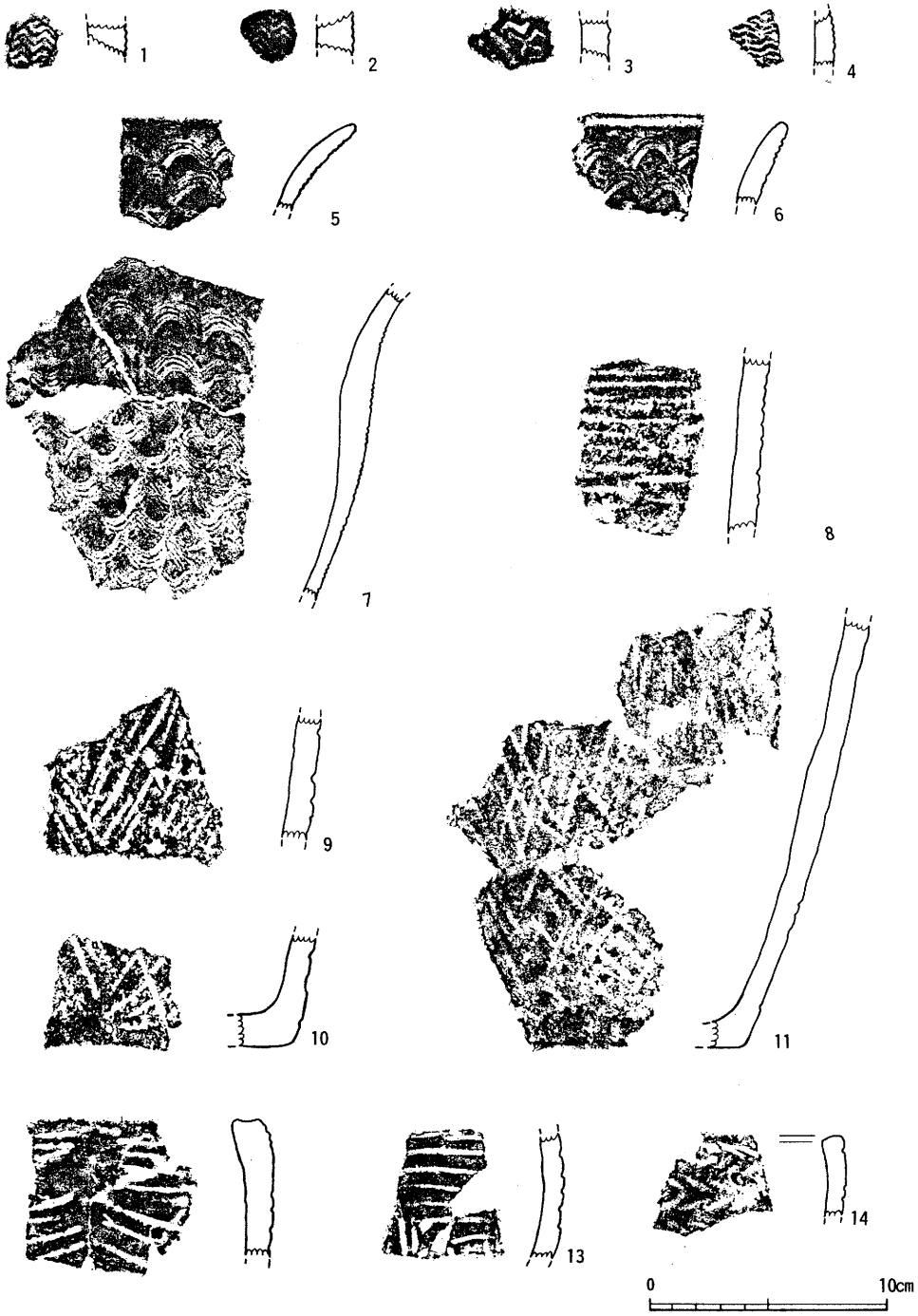
H類　くの字形に外反する口縁部に刺突文を施し、胴部に沈線文と撚糸文を施した土器（第7図15・16 第9図37～40）

I類　撚糸文土器（第7図15・16、・第9図37～40）

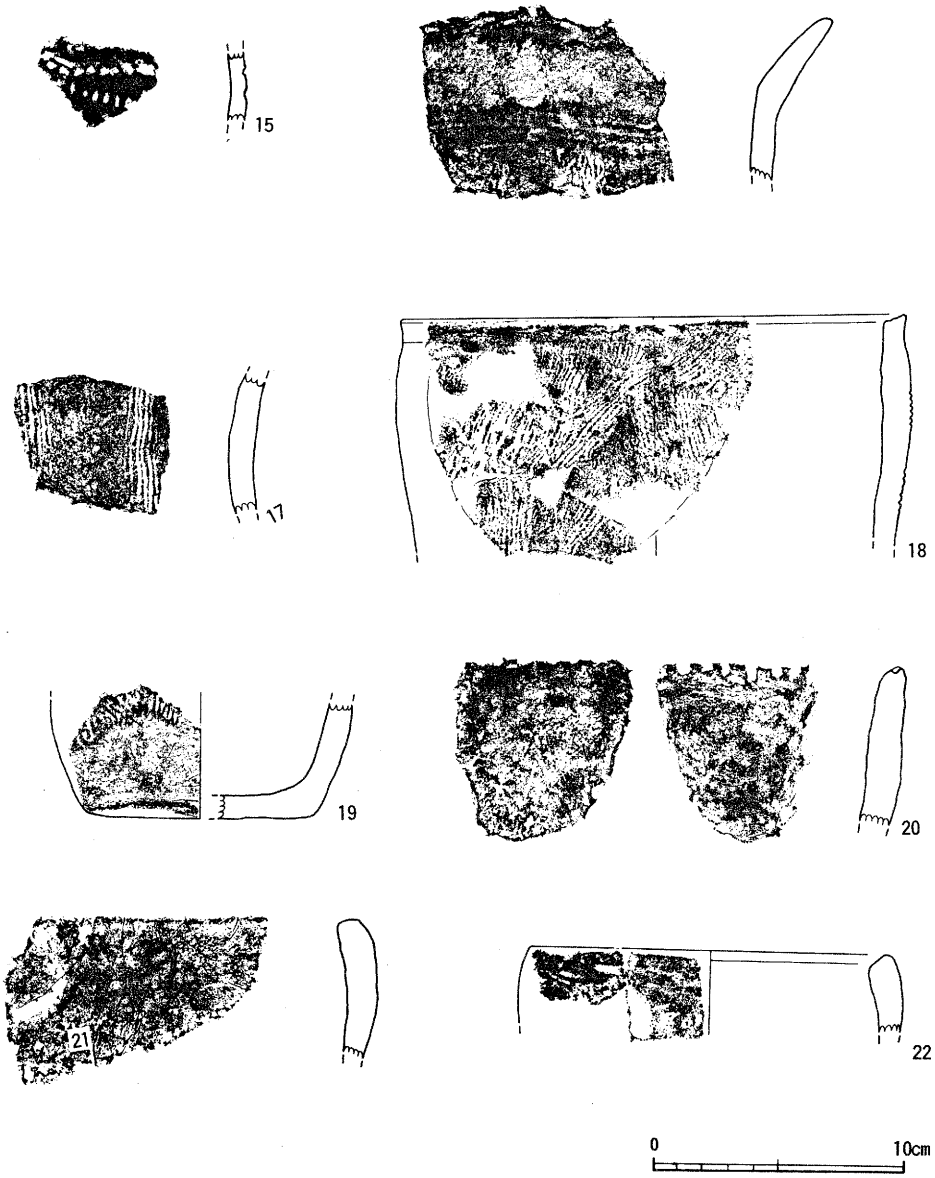
a．縦方向或は斜方向に施す。（第7図18）

b．弧状に連続して施す。（第6図5～7、第8図32）

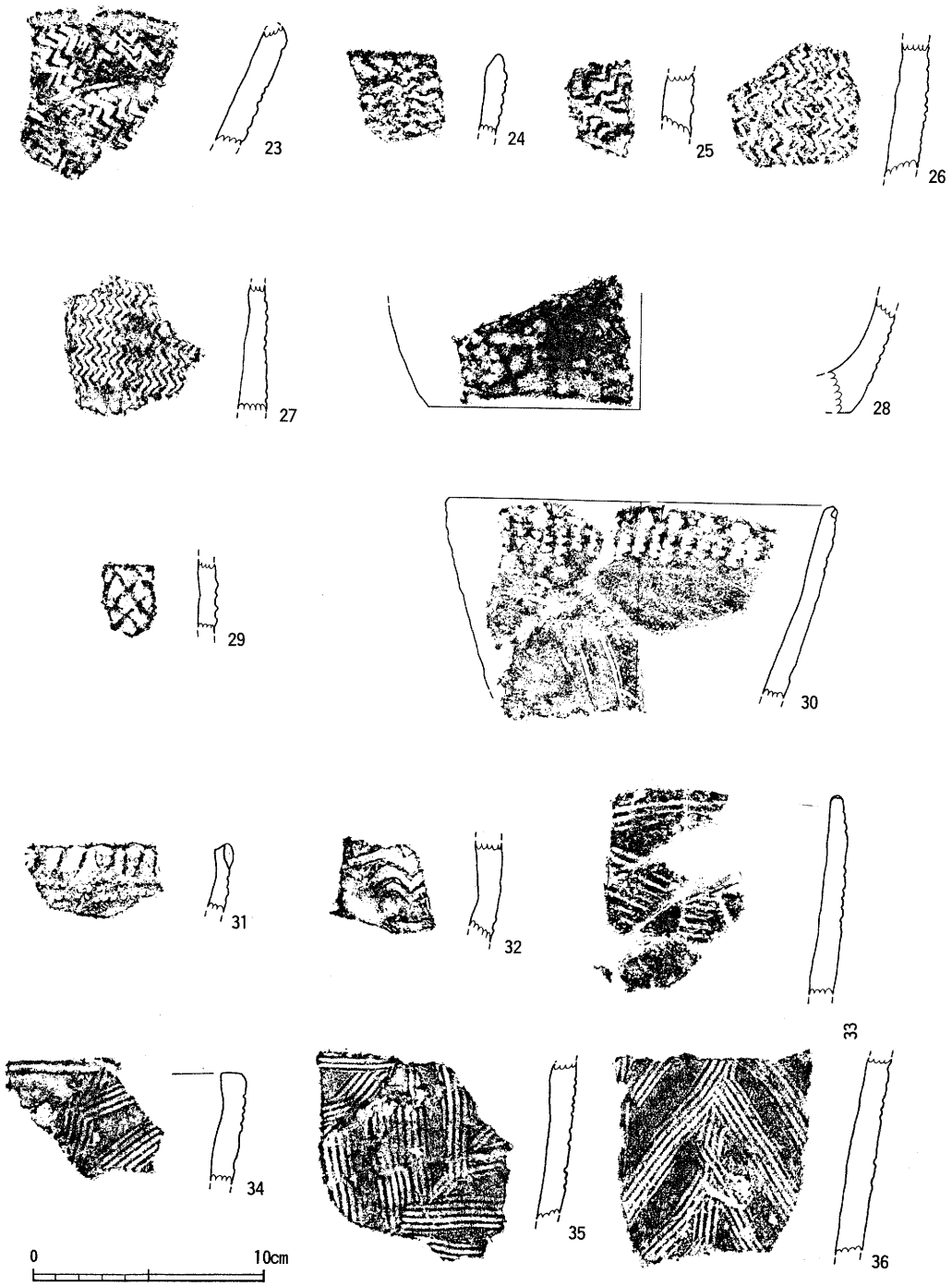
J類　刺突文土器（第9図43）



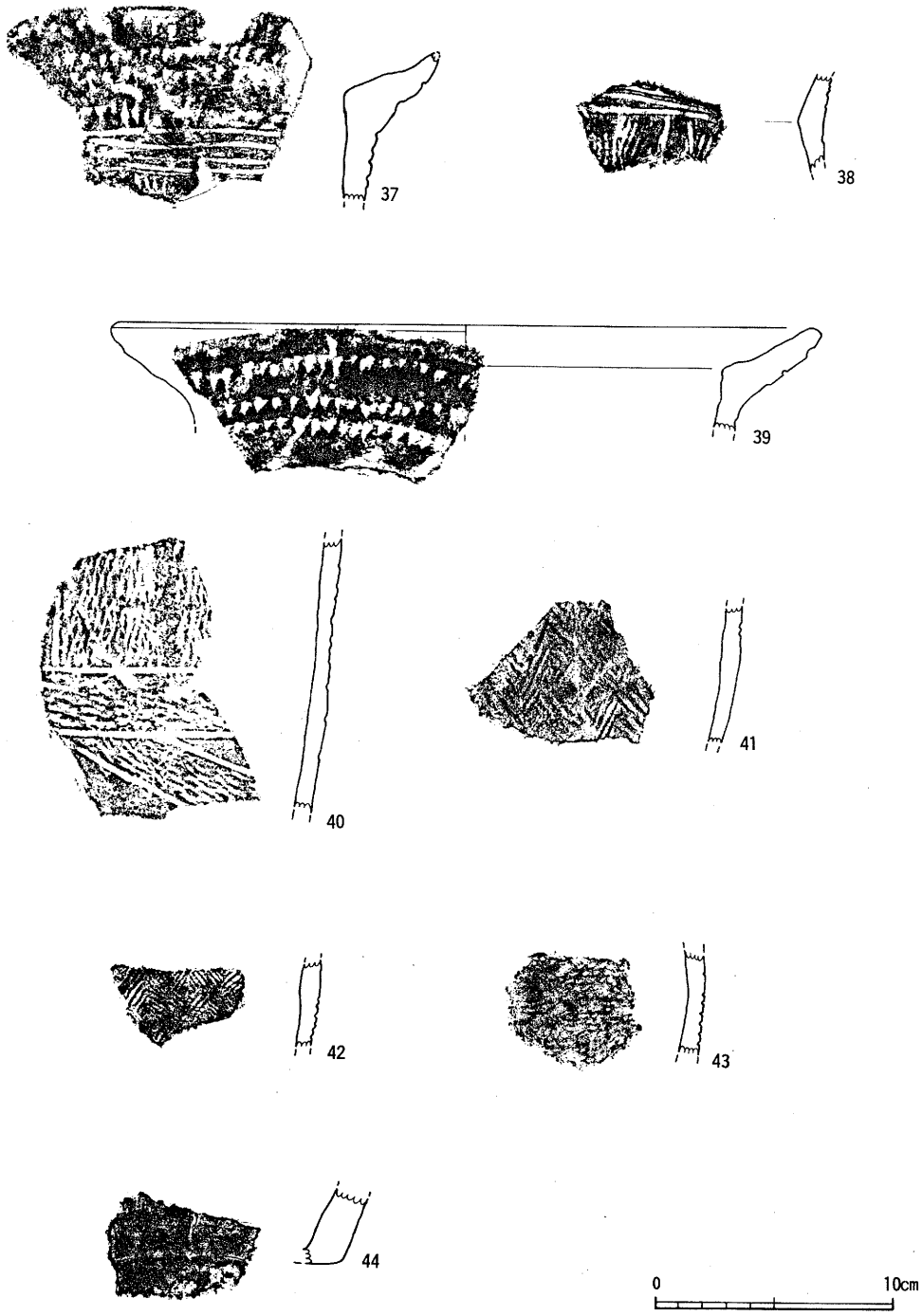
第６図　Ａ地区出土縄文早期土器実測図（Ⅰ）



第７図　Ａ地区出土縄文早期土器実測図（Ⅱ）



第８図　Ｂ地区出土縄文早期土器実測図（Ⅰ）



第９図　Ｂ地区出土縄文早期土器実測図（Ⅱ）

第4表　縄文土器観察表

図番号	グリッド	器種	器部	文様 外面	文様 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	器面調整 底面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	口径	器高	備考
1	ℓ－6	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ナデ		明黄橙 10YR 7/6	橙 7.5YR 7/6	白・うす茶・半透明の砂粒。	良好			
2	b－6	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ナデ		にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	うす茶・透明な砂粒を含む。	良好			
3	b－6	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ナデ		にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 5YR 6/4	白・うす茶・雲母の砂粒を含む。	良好			
4	g－6	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ナデ		橙 7.5YR 7/6	にぶい黄橙 10YR 7/4	雲母・うす茶の砂粒を含む。	良好			
5	b－7	深鉢	口縁部	貝殻腹縁を波状に施文		貝殻腹縁を波状＋ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/3	浅黄橙 10YR 8/3	きめ細か。1ミリ前後の灰白の砂粒を含む。	良好			
6	d－8	深鉢	口縁	貝殻腹縁を波状に施文		貝殻腹縁を波状＋ナデ	ナデ		浅黄橙 7.5YR 8/4	浅黄橙 7.5YR 8/4	黒・灰色。細砂粒を含む。	良好			
7	d－9	深鉢	頸部 胴部	貝殻腹縁を波状に施文		貝殻腹縁を波状＋ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/3	浅黄橙 10YR 8/3	きめ細か。1ミリ前後の灰白・褐灰の砂粒を含む。	良好			
8	d－8	深鉢	胴部	横方向の貝殻腹縁刺突文		ナデ	ヘラナデ		浅黄橙 10YR 8/4	にぶい橙 5YR 6/4	角閃石を含む。細砂粒を含む。	良好			
9	d－8	深鉢	胴部	斜方向の貝殻腹縁刺突文		ナデ	ヘラナデ		橙 2.5YR 6/6	浅黄橙 7.5YR 8/4	1ミリ位の角閃石含む。細砂粒含む。	良好			
10	d－8	深鉢	底部	斜方向の貝殻腹縁刺突文		ナデ	ヘラナデ	ナデ	浅黄橙 2.5YR 7/4	灰褐 5YR 5/2	1ミリ～2ミリの黒雲母含む。細砂粒を含む。	良好			
11	d－8	深鉢	胴部 底部	格子目状の貝殻腹縁刺突		ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐 2.5YR 5/6	にぶい褐 7.5YR 5/3	きめ細か。1ミリ～4ミリの灰白の砂粒を含む。金雲母含む。	良好			
12	b－10	深鉢	口縁部	横方向に貝殻腹縁刺突		ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/4	浅黄橙 10YR 8/4	黒・灰色の細砂粒を含む。	良好			
13	b－6	深鉢	胴部	横方向にヘラ沈線		ナデ	ナデ		にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	細砂粒を含む。	良好			
14	d－10	深鉢	口縁部	綾杉状のヘラ沈線		ナデ	ナデ		にぶい橙 5YR 6/4	にぶい赤褐 5YR 5/3	きめ細か。細砂粒含む。石英多く含む。角閃石をわずか含む。	良好			
15	e－6	深鉢	頸部	列点文・ヘラ刺突文		ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/3	にぶい橙 7.5YR 7/4	きめ細か。細砂粒を含む。	良好			
16	b－6	深鉢	口頸部	縦方向の撚糸文・3本沈線		ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/4	浅黄橙 10YR 8/4	角閃石を含む。1ミリの黒・灰色。細砂粒を含む。	良好			
17	d－9	深鉢	頸部	縦方向の撚糸文		ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/4	浅黄橙 10YR 8/4	黒・こげ茶の石粒と細砂粒を含む。	良好			
18	e－6	深鉢	口縁部	撚糸文		撚糸文+ナデ	ナデ		明赤褐 2.5YR 5/6	にぶい赤褐 5YR 5/3	きめ細か。細砂粒、2～3ミリの砂粒を含む。1ミリぐらいの石英を含む。	良好	20 cm		
19	b－6	深鉢	底部			ナデ	ナデ		にぶい橙 5YR 7/4	にぶい橙 5YR 7/4	角閃石。黒い茶灰色の細砂粒を含む。	良好	底径 9 cm		
20	c－8	深鉢	口縁部	口唇部に刻目		ナデ	ナデ		にぶい橙 5YR 7/4	にぶい橙 5YR 7/4	角閃石。1ミリの細砂粒を含む。	良好			
21	c－9	深鉢	口縁部			ナデ	ナデ		橙 5YR 6/6	にぶい橙 5YR 7/4	黒・灰色。細砂粒を含む。	良好			
22	b－6	深鉢	口縁部			ナデ	ナデ		にぶい黄橙 10YR 6/3	灰黄褐 10YR 6/2	0.5～1ミリの灰白の砂粒を含む。	良好	14.4 cm		
23	ℓ－6	深鉢	口縁部	山形押型文		山形押型文	ナデ		にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/3	0.5～2ミリほどの灰白の砂粒を多く含む。	良好			
24	k－6	深鉢	口縁部	山形押型文		山形押型文	ナデ		にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/4	きめ細か。0.5～2ミリほどの灰白の砂粒を含む。角閃石・石英を含む。	良好			

図番号	グリッド	器種	器部	文様	器面調整				色調		胎土	焼成	口径	器高	備考
				外面	内面	外面	内面	底面	外面	内面					
25	j－5	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ヘラ磨キ		浅黄橙 7.5YR 8/3	にぶい橙 5YR 6/4	細砂粒を含む。	良好			
26	g－5	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ナデ		にぶい橙 5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/3	きめ細か。0.5～3ミリほどの灰色の砂粒を多く含む。角閃石・石英を含む。	良好			
27	i－4	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ナデ		にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい橙 5YR 6/4	きめ細か。1ミリ前後の灰白・褐の砂粒を含む。角閃石・金雲母を含む。	良好			
28	h－5	深鉢	底部	山形押型文		山形押型文	ナデ	ナデ	橙 2.5YR 6/6	にぶい黄橙 10YR 7/3	1～2ミリの灰白の砂粒を多く含む。石英・角閃石を含む。	良好	底径 18.2cm		
29	k－6	深鉢	胴部	格子目押型文		格子目押型文	ナデ		明黄褐 10YR 7/6	にぶい黄橙 10YR 7/4	1ミリ前後のうす茶・灰色の砂粒を含む。	良好			
30	j－4	深鉢	口縁部	口縁部に貝殻腹縁刺突、口唇部に刻目。		貝殻条痕ナデ	ナデ		にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄褐 10YR 5/3	0.5～1ミリほどの灰黄褐の砂粒を含む。	良好	口径 16.5cm		
31	j－5	深鉢	口縁部	口縁部に貝殻腹縁刺突、その下位に横方向の貝殻腹縁刺突。		ナデ	ナデ		にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 6/4	きめ細か。0.5ミリほどの灰白の砂粒を含む。角閃石・石英を含む。	良好			
32	h－5	深鉢	胴部	貝殻腹縁を波状に施文		ナデ	ナデ		にぶい橙 5YR 6/4	にぶい黄褐 10YR 5/4	きめ細か。0.5～2ミリほどの灰白・橙の砂粒を含む。角閃石・石英・金雲母を含む。	良好			
33	k－4	深鉢	口縁部	口唇部に刻目、貝殻腹縁条痕文をジグザグ。		ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/4	浅黄橙 10YR 8/4	茶・灰色の細砂粒を含む。	良好			
34	k－5	深鉢	口縁部	貝殻腹縁条線文		ナデ	ナデ		にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 6/3	0.5～4ミリほどの灰白・褐の砂粒を含む。角閃石・石英を含む。	良好			
35	ℓ－5	深鉢	胴部						にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	細砂粒を含む。	良好			
36	h－5 k－5	深鉢	胴部	斜方向の貝殻腹縁条痕文		ナデ	ヘラナデ		にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	細砂粒を含む。	良好			
37	k－5	深鉢	口頸部	ヘラ刺突文4本沈線		ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 2/3	浅黄橙 10YR 2/3	細砂粒を含む。	良好			
38	k－6	深鉢	頸部	3本沈線撚糸文		ナデ	ナデ		にぶい橙 7.5YR 7/3	浅黄 2.5YR 8/3	きめ細か。1ミリほどの褐色の砂粒を含む。角閃石を含む。	良好			
39	j－5	深鉢	口縁部	ヘラ刺突文		ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/3	浅黄橙 10YR 8/3	きめ細か。1ミリ前後の黒・褐灰の砂粒を含む。石英・角閃石わずかに含む。	良好	口径 約29cm		
40	ℓ－6	深鉢	胴部	平行沈線撚糸文		ナデ	ナデ		浅黄橙 10YR 8/4	浅黄橙 10YR 8/3	きめ細か。細砂粒を含む。	良好			
41	ℓ－6	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ナデ		淡橙 5YR 8/3	浅黄橙 7.5YR 8/3	細砂粒を含む。	良好			
42	ℓ－5	深鉢	胴部	山形押型文		山形押型文	ナデ		にぶい褐 7.5YR 6/3	灰黄褐 10YR 5/2	きめ細か。1ミリ前後の灰白・橙の砂粒を含む。金雲母を多く含む。	良好			
43	k－7	深鉢	胴部	撚糸文		撚糸文+ナデ	ヘラナデ		にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい褐 7.5YR 5/3	0.5～3ミリほどの黄褐とくに灰白の砂粒を多く含む。	良好			
44	h－4	深鉢	底部				ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	にぶい赤褐 5YR 5/3	にぶい赤褐 5YR 5/4	きめ細か。0.2～2ミリほどの灰白の砂粒を含む。角閃石を含む。	良好			
45	ℓ－7	深鉢	口縁部	口唇部に刻目3条凹線	2条列点文 1条凹線	ナデ	ナデ		にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	黒・こげ茶の石粒と細砂粒を含む。	良好			
46	ℓ－7	深鉢	口縁部	口唇部に刻目3条凹線	2条列点文 1条凹線	ナデ	ナデ		橙 5YR 6/6	にぶい橙 10YR 7/3	茶・灰色。細砂粒を含む。	良好			
47	c－10	深鉢	口縁部	口唇部に刻目4条凹線	2条列点文 1条凹線	ナデ	ナデ		にぶい橙 7.5YR 7/3	にぶい橙 7.5YR 7/3	細砂粒を含む。	良好			
48	j－3	深鉢	胴部	幾何沈線		ナデ	ナデ		にぶい橙 7.5YR 7/3	にぶい橙 7.5YR 7/3	黒・灰色。細砂粒を含む。	良好			
49	i－7	深鉢	口縁部 胴部			ナデ	ナデ		橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 7/6	きめ細か。1～2ミリ灰白の砂粒を含む。角閃石を含む。	良好			

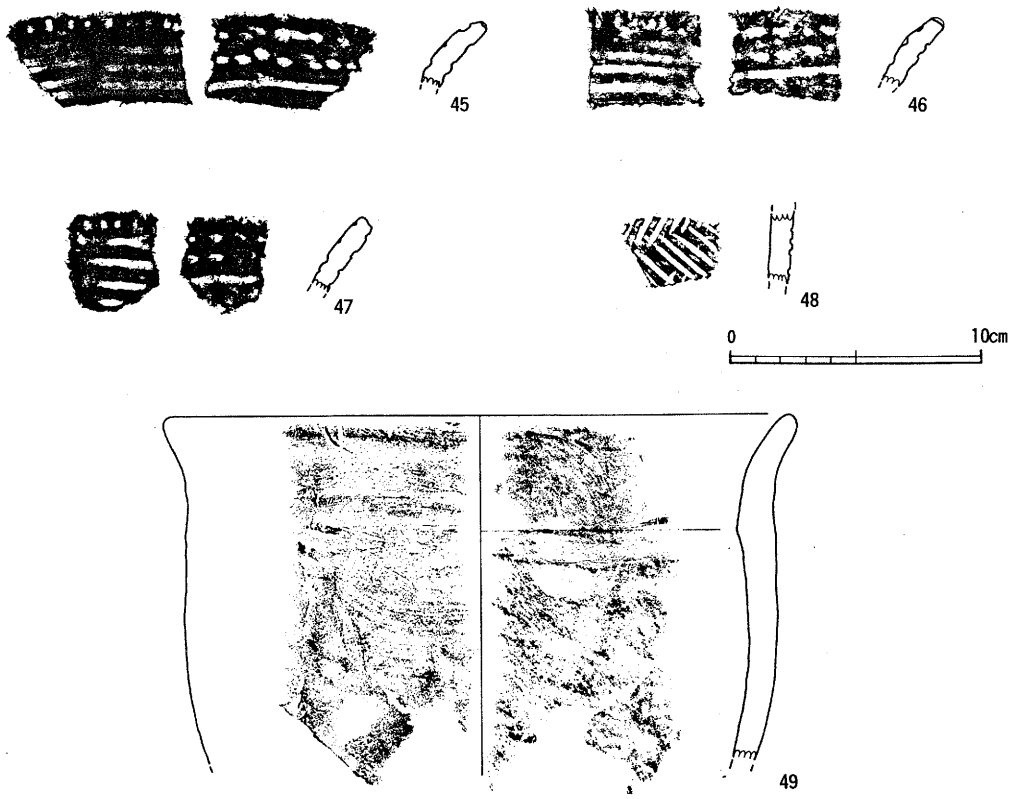
K類　無文土器（第7図21・22）

前期土器

口縁部の表裏面に刺突文と短線列線を施し、口唇部に刻目も有する。胴部には短い沈線文も綾杉状・鋸歯状に施す曽畑式土器で、焼成は良好である。

後期土器

i－7でアカホヤ上層で出土したが遺構には伴なっていない。若干外反気味の口縁部を有する口径24.8㎝の粗製の深鉢である。内外面ともヨコナデを施し、焼成は良好である。



第10図　縄文前期・後期土器実測図

(3) 石　　器

石器としては、打製石鏃３（ｃ－６・ｈ－６・ｉ－７）、局部磨製石斧２（ｂ－７・９）、磨石、剥片が出土している。打製石鏃は凹基の三角形式（二等辺三角形状のもの２・正三角形状のもの１）で、１点は基部の両端部を斜角に加工している。石材はすべて黒曜石（姫島産１点を含む）である。磨石はほとんど砂岩製である。局部磨製石斧は両刃の細身のタイプで、刃部と両側縁に擦痕があり、粘板岩製である。

その他に表採品の打製石鏃が２点ある。

4. 平安時代以降の遺構と遺物

平安時代の以降の遺構は検出されなかったので、未調査の北側に遺構の存在が推定される。遺物としては、ヘラ切りの土師器坏・土師器甕・内黒土器・布痕土器・須恵器・緑釉・青磁などが出土している。

第Ⅲ章　ま　と　め

猪之椪遺跡は、縄文時代早期・前期・後期と平安時代以降に営まれた遺跡である。特にアカホヤ下層の縄文時代早期にピークがあり集石遺構を６基営んでいるが、弥生時代～古墳時代は経済基盤の変化からか空白となっており、福島川沿いの丘陵上に移動したものと思われる。

縄文早期の土器群のうちｃ類は前平式に、Ｊ類は中尾田９ℓ類[1]に、Ｉｂ類は変形撚糸文（石峰式系）[2]に、Ｈ類は塞ノ神Ｂ式[3]に、Ｆ類は桑ノ丸Ⅲ類[4]に対比することができる。山形押型文は口縁部内面の原体刻文が消え、平底である点からヤトコロ式[5]に比定される。押型文のうち楕円押型文が出土していないのは当遺跡の時期や性格を考える上で注目される。山形押型文はｅ～ｇ・ℓ－６、ｇ～ｊ・１－５の標高81～82ｍ間に、塞ノ神式はｊ・ｋ－５、ｋ・ℓ－６の標高81～82ｍ間に、Ｅ類がｄ－８、Ｉｂ類がｄ－９の標高80～81ｍ間に、ｃ類がｊ－４・５の標高81～82ｍ間にと分布域を異にしている。北東端にＨ類が、南西端にＥ・Ｉｂ類が分布し、その間に山形押型文が広く分布する。１点だけであるが、格子目押型文がｋ－６で、刺突文がｋ－７で出土しているのは注目される。

集石遺構は６基検出されたが、掘り込みを有するものは半数であり、特に６号集石遺構は最大規模で、焼石の総重量102.25㎏は遺跡出土焼石総重量の6.1％を占める。集石遺構は標高80.0ｍ～81.25ｍのＡグループ（４基）と標高81.0ｍ～81.75ｍのＢグループ（２基）に分かれると伴に、焼石の分布がｋ－５を中心とするグループとｃ－９を中心とするグループに分かれるのは、土器の分布に対応しており当遺跡の時期や性格を考える上で示唆的である。

アカホヤ上層から前期の曽畑式土器が出土したが、遺構は全く検出されなかった。また平安時代以降の土器群として土師器（ヘラ切り）・内黒土器・須恵器・縁釉・青磁などが出土し、上限は平安時代中期（10世紀前半）であるが、遺構は検出されなかった。

今回の発掘調査によって県南部の縄文時代早期の様相が部分的であるが明らかになると伴と、隣接地の鹿児島県を含めた南九州や東九州を踏まえて比較検討する資料を得ることができたのは大きな成果であった。土器編年・他地域との比較などの問題点は本報告書の中で明らかにしていきたいと思う。

【 註 】

(1) 新東晃一他　「中尾田遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』1981

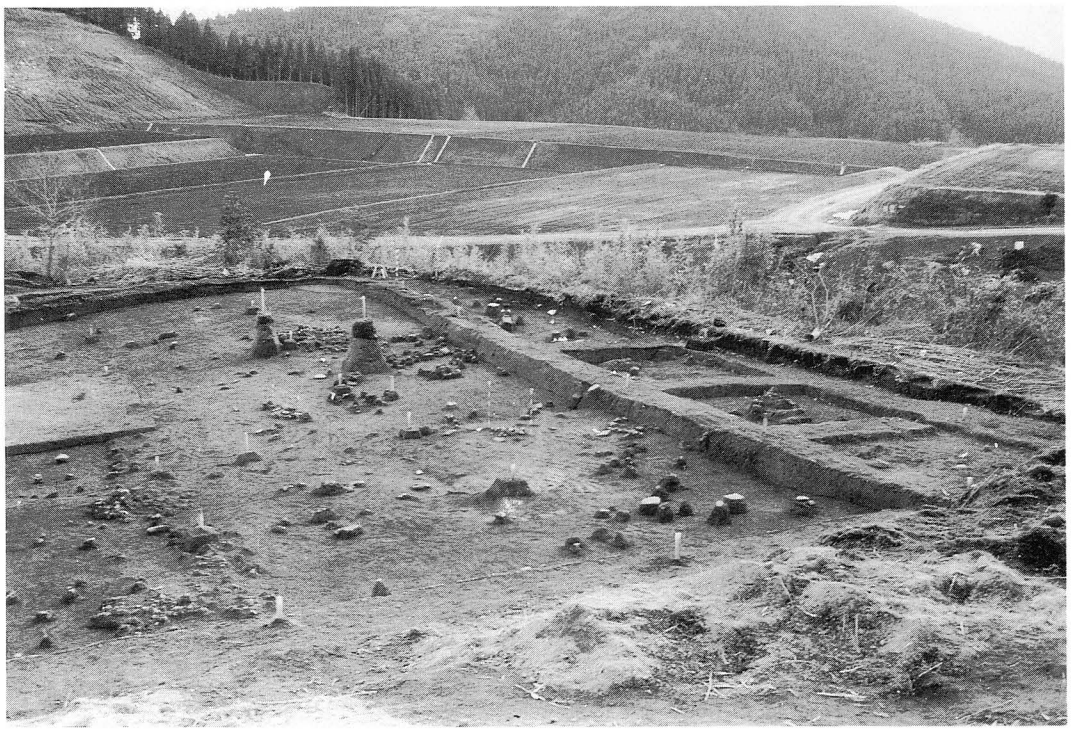
(2) 河口貞徳　「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』第12集　1965

(3) 河口貞徳　「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第６号　1972

(4) 新東晃一編　「桑ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(7)』 1977

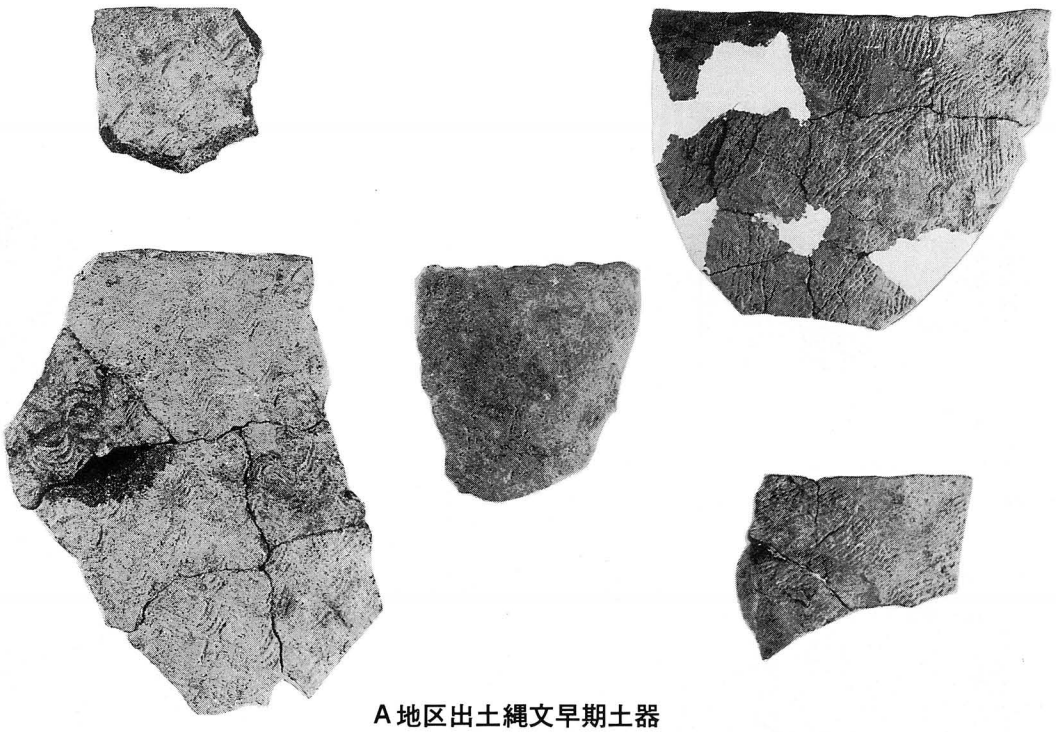
(5) 坂本嘉弘　「押型文土器の変遷」『大分県史　先史編Ⅰ』 1983

猪之槌遺跡遠景



A地区遠景

図版2



A地区出土縄文早期土器

B地区出土縄文早期土器

串間市文化財調査報告書　第１集

猪之椪遺跡

発行年月　昭和６２年３月
編集・発行　串間市教育委員会
印　　刷　黒田謄写堂